

【講義概要】

浄土真宗は、親鸞聖人によってあきらかにされたみ教えである。それは、
智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ（高僧和讃）

と讃えられたように、恩師・法然聖人より伝承された教義である。主著である『選択集』の伝授を受けた弟子の一人として、誤解をする権力者や聖道門に対して、さらには法然門下でわき起こる異義に対して、恩師の教えの真実義を顕彰されたみ教えといえる。『教行証文類』の後序に、

『選択本願念仏集』は、禅定博陸〔月輪殿兼実、法名円照〕の教命によりて撰集せしめるところなり。真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり。見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。年を渉り日を渉りて、その教誨を蒙るの人、千万なりといへども、親といひ疎といひ、この見写を獲るの徒、はなはだもつて難し。しかるにすでに製作を書写し、真影を図画せり。これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり。よりて悲喜の涙を抑へて由来の縁を註す。

と記された内容からも、弟子として気概がうかがえる。

ところが親鸞聖人の流れをくむ浄土真宗（真宗）諸派は、「浄土宗」鎮西派や西山派と呼ばれる法然聖人を開祖とする浄土宗諸派には属していない。それどころか、法然聖人を中心とする浄土宗とは距離をおき、別に親鸞聖人を開祖として、親鸞聖人のみ教えの独自性を強調しながら、浄土真宗（真宗）諸派として教団を形成していくこととなる。

これは偶然に起こった流れではない。親鸞聖人の廟所を守っていた聖人の血脈を受け継ぐ人々の中から意図的に起こされた流れといえる。親鸞聖人の面授の弟子（直弟子）とは一線を画し、血脈に属する如信上人を第二代にすえて、親鸞聖人を開祖とし、廟所を本願寺として寺院化し、親鸞聖人と本願寺を中心とした教団が形成されたのである。そして親鸞聖人から如信上人へと「口伝」による伝達形式によって伝承されたという逸話をもとに、教義においても浄土真宗のみ教えの独自性を明らかにされていくこととなる。その流れが、その後の中興の祖となる蓮如上人の伝道へと展開し、今日の浄土真宗の教学へと強い影響を与えている。

この講義では、親鸞聖人以降、特に本願寺の歴代ご門主となる祖師方の著述を紐解きながら、親鸞聖人のみ教えの特徴がどのようにまとめられていったか、今日につながる浄土真宗の教学の変遷について学びたい。

【テキスト】

『浄土真宗聖典』（註釈版）本願寺出版社

『浄土真宗聖典全書』第4巻・第5巻（相伝篇上・下）本願寺出版社

【参考文献】

『聖典セミナー 口伝鈔』 梯實圓先生 本願寺出版社

『光をかかげて一蓮如上人とその教え一』 梯實圓先生 本願寺出版社

その他、講義中に随時紹介する。